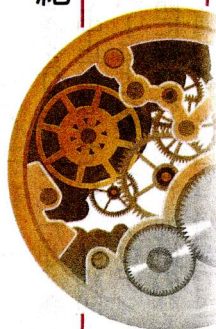


越境精神

小長谷 有紀



梅棹忠夫の残したもの 9

日本人の課題

梅棹忠夫はかれこれ40年以上も前に、人類の未来について憂慮していた。本質的な問題として「科学は罪深いものです」と述べ、進歩の向きを変えたほうがよいと提案した。

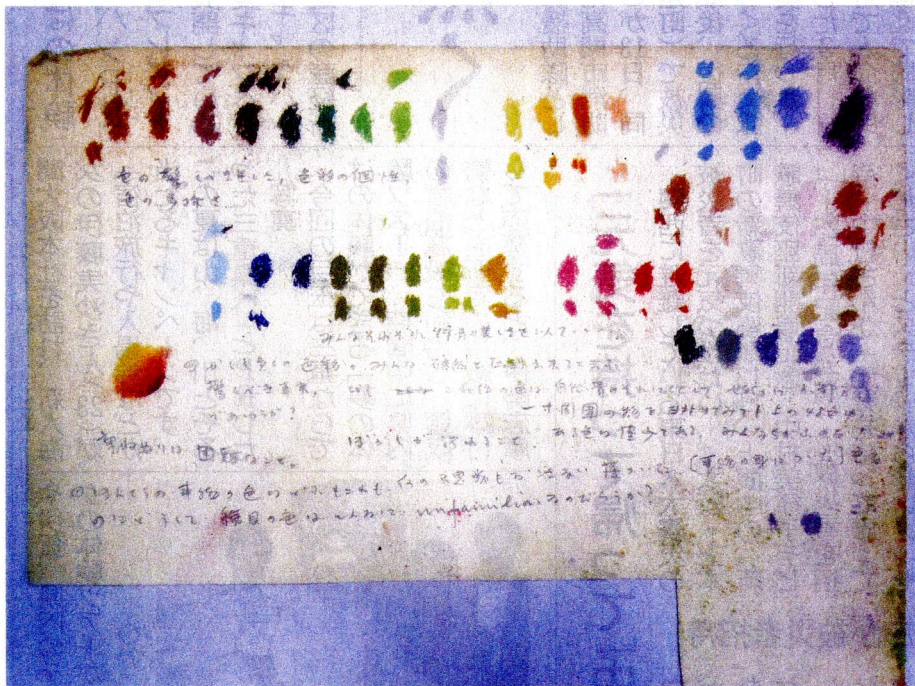
一方、日本あるいは日本人の未来については、2つの課題を懸念していた。

一つは「発信不能症」であること。「そこに対しては自己主張をおさえ、謙讓の美德でゆく」点で、「たいへんおだやかな文明」ではあるが、情報発信力に乏しい。「世界には、自己主張がよく、ときには情報アグレッションともいえる文明」もあるもので、あんまり控えめすぎると国際的に理解されないだろうと心配した。

もう一つは「純粹培養文明」であること。「諸外国はみな民族問題でなやみぬいて、それぞれに経験をつんでいけるにもかかわらず」、日本は「免疫がまったくてきていないままで、二一世紀に突入する」と危惧した。

前者は国際的な課題として、後者は国内の課題として、それぞれ

異文化への共感と敬意



スケッチブックに残された「多様の美」。梅棹忠夫著『裏がえしの自伝』によれば、中学生時代にパステルを使い始め、その魅力の虜になったという

異なる文脈で語られていたが、改めてこうして並べてみると、別々のことではないなあと思い知らされる。「辺境そたちの坊ちゃん」

だからこそ、恥ずかしがりやで「情報シャイネス」ともいえる特徴」がある、というわけだ。

それでは、わたしたちが、世界とうまく付き合い、世界に伍していくためにはどうすればよいだろう

うか。

とりあえず、異質な考え方や触れ合う経験はとても重要な肥やしになるだろう。ただし、何よりも大切なことは、異質な考え方をもつ人びとに対するリスpekトである、とわたしは思う。

民族学や文化人類学と呼ばれる学問は、あらゆる民族や文化のそれぞれの素晴らしさを発見し、共感し、人類の普遍性として理解していくことをめざす。複数の専門をものにしてきた梅棹がことさらに民族学者と名乗ったのは、国立民族学博物館の初代館長となって以降、いわば民族学を推進するための、営業上の戦略だった。

もちろん、心にもないことを述べたわけではない。その証拠を梅棹アーカイブズに残されたスケッチブックの中の1枚に見いだすことができる。

色見本のようにパステルで多様な色を並べて描き、「色の驚くべき美しさ、色彩の個性、色の多様さ」「みんなそれぞれ特有の美しさを以って…」などと書きつけられている。

多様な色を用いて1枚の絵を仕上げるように、多様な考え方を愛でることによって、わたしたちの弱点は自然に克服されて、人類の未来を描きやすくなることだろう。

(国立民族学博物館教授)